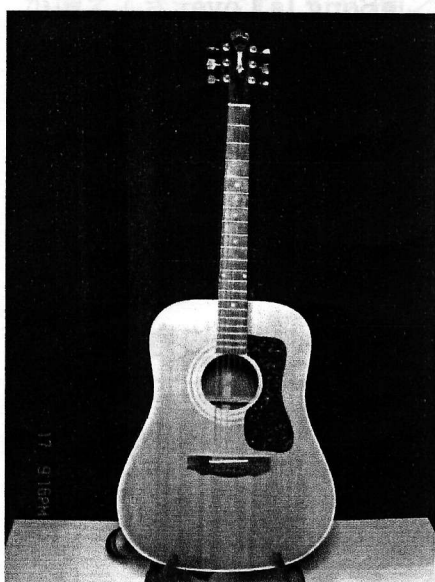


Every guitar tells a story (ギター物語 part2)

大阪 西田 隆郎 (Sparrows)

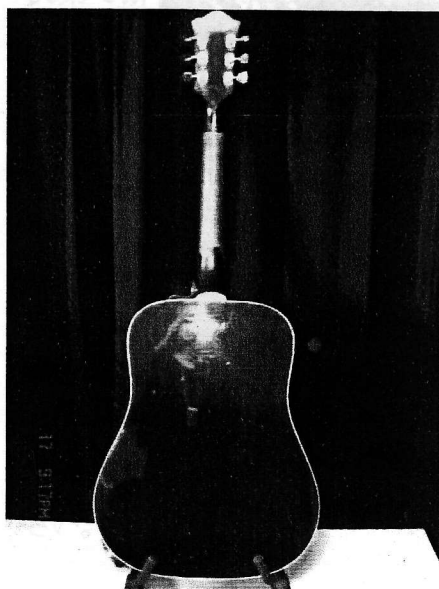
前号の「中井氏編集後記 15 行 16 行」が実行されれば、会員の奥様のほとんどを敵に回すこととなりそうで、若干の戸惑いを覚えますが、後戻りはできません Part2 に突入します。Part1 はマーチンギターの話でしたが今回はそれ以外のギターの話をしていただきます。

① Guild D40 No.103419 1973 年製



私が購入したメジャーギターの第一号、唯一新品で買った思い出のあるギターです。ちょっと話が長くなります。

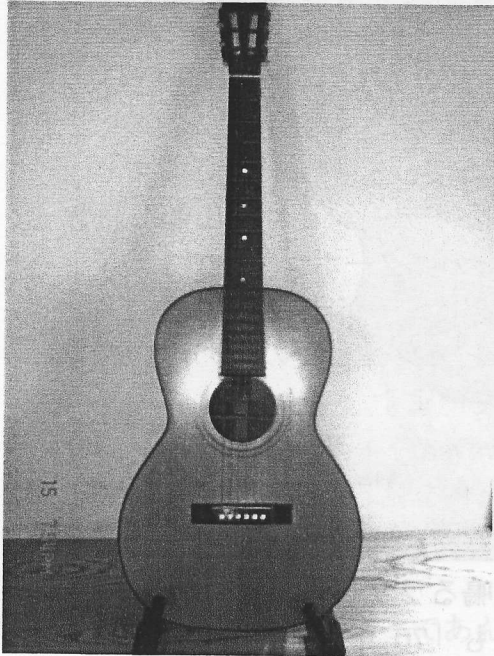
35 年前、初めて就職したのは外資系会計事務所でした。入所間もなく、グアムのホテルの仕事1週間、そこから直接マニラの銀行1週間という魅力的な出張命令が出ました。最初のグアムの担当者は気難しいカナダ人で、仕事がなかなか進まない不安な状況でした。昼休み、唐突に「ギターを買いたい話」を切りだしました。そこから突然状況が変わり、どんなギター？どんな音楽が好き？どんなグループ？ たて続けの質問に会話が弾みました。もちろん、PP&M談義にも花が咲きました。今夜ビーチで「カラパナ」風のライブがあるので一緒に行こうって誘われ、まさに意気投合！ そして、翌日から仕事もどんどんはかどりました。



最後の日に、彼はアガニアにある楽器店に連れて行ってくれました。マーチンも数本ありましたが、当時ポールサイモンの使っていたあの変な形のピックガードのギターに魅かれました。それがこの GUILD との出会いでした。新品なのになぜかギターケースが無いとのことで、茶色のボール紙でできたボロケースで持ち帰りました。問題はこのケースでマニラ、そして東京まで無事連れて戻らなければならないことでした。雨にぬれるとケースが破れそうなので、紐でぐるぐる巻きにして運びました。通関時、このボロケースが思わぬいい仕事をしてくれました。

マニラのホテルで厳しいアメリカ人のボスと合流しました。ミスターニシダは仕事にギターを持ち歩いている

との噂が既に広まっており、内心びくびくものでした。その夜、ボスが僕の部屋にやってきました。お説教かと思いきや、ギターを見せてくれ、是非弾かせてほしいとのことで、実は彼もまたまたPP&Mの大ファンで、夜寝る前にギターを弾かないと安眠できない病気であると告白しました。ベッドに腰掛け「サンフランシスコ・ベイ・ブルース」とかを弾いて見せたら、是非その弾き方を教えてくれってことになり、それ以来、毎晩僕の部屋に通うようになっていました。そんな訳で、僕の初海外出張は「芸(PP&M)は身を助ける」、実に充実したものになりました。



②Regal Parlor No.5354

もう一つ、このギターの思い出は、僕の結婚式でスパロウズのベースをお願いしている内山修さん(当時も「猫」で活躍中)がこのギターで「僕の庭」という素敵なオリジナル曲を歌ってくれました。涙が出そうにうれしい思い出です。

前置きが長くなりましたが、サイド、バックはマホガニー、トップはスプルース。音色はマホガニー独特のレスポンスの早いクリーンな響き、マーチンのD28のような低音の深み、音量こそありませんが、どちらかと言えばシャリーンとしたストローク向きのギターです。

おまけに貰ったアーニーボールのバックスキンのストラップは、今も私のメイン？ストラップとして35年を経て今も現役活躍中です。



② Regal Parlor No.5354 1920年代後半製

サイド、バックはバーチ、トップは不明。指板は黒く着色されたもの、とにかくチープな材料で作られています。このメーカーの歴史は古く1900年頃シカゴで創業され、廉価なギター、ウクレレ等大量生産し、楽器の普及に貢献した会社のようなようです。10年位前、文字通り「50の手習い」でギターをもう一度練習しようと思い立ち、ステファン・グロスマンのブルース教則ビデオを夢中でコピーした時期がありました。その中で「ボトルネック奏法にはステラやリーガルのようなチープなギターで弦高が高くなったようなものの方がピッタリなんだよ」って説明がありました。早速、前号で紹介したRHYギターを覗くと、またもや運悪く？このギターが待っていました。文字通りチープな価格で譲り受けました。現在このギターは、仕事場の近くの音楽仲間の集まる小さ

なバーの壁にかかっています。毎晩誰かと遊んでいるようです。たまに、このギターでそこ集まる若い人達に PP&M 布教活動に努めています。

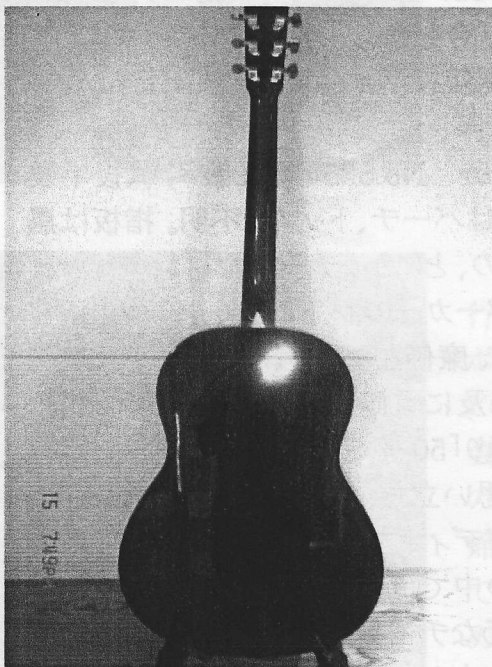
③ Larrivee L09 No.14673 製作年不明 (誰か教えて下さい)



サイド、バックはインディアンローズ、トップはスプルース。材質はなかなか良質なもので、派手なインレイもなく上品なギターです。

ラリビー社は噂によると良い材料を大量に保有しており、マーチン社にも供給しているとの事です。材木商としても成功しているようです。ピーターがラリビーに持ち替えたのはアルバムでは 1983 年 Such is Love あたりでしょうか? ニュースステーションに出演したときに久米宏の「そのギターボロボロですね?」って感じのインタビューが印象に残っています。音色はチーンとテンションの高い硬い響きだった事記憶しています。

「25th anniversary」「Holiday Concert」「Lifeline live」を見るにつけ聞くにつけ、またまた持病が再発しました。しかし、なかなか「あの音」の鳴るラリビーが見つかりません。RHYギターも「70年代前半のLボディは数も少なく、市場に出ませんよ」と期待の持てない返事でした。まずこのギターを見つけてくれました。確かにマーチンより硬質の響きです。その音の違いの原因を調査してみました。一つの理由はスケールの長さの違いだと発見しました。ちなみに、前回紹介のマーチン D28 はナットからサドルまで 64.25 センチ、このギターは 64.61 センチと 3.6 ミリも長くなっています。うーん、そんな事にこだわっている自分に「それがどないした、ちゅうねん!？」と言う大阪的「自分一人突込み」が聞こえてきます。どちらかと言えば現在ピーターの使用しているピカピカの L09 に近い音かもしれません。

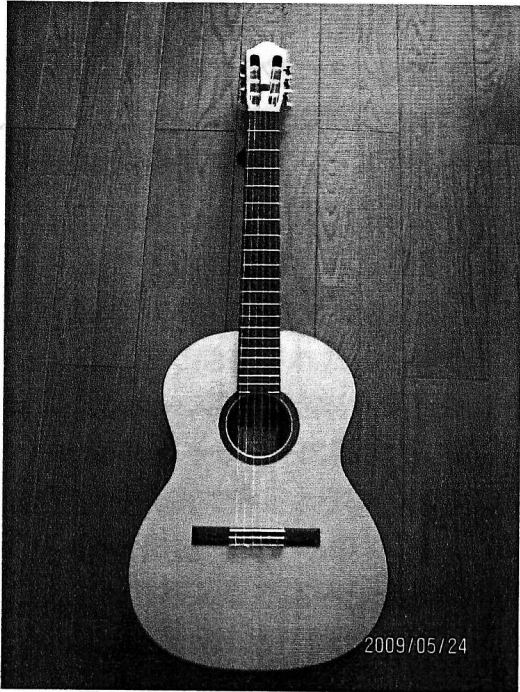


④ La Plante Paul Stookey Model Custom 1993 年製

私の持っているギターの中で、その「所有」に一番批判を受けているものです。

ピーターの立場で、このギターを所有することは犯罪行為ではないか？という声が漏れ伝わってきます。しかも、このギターの情報を得たのが FC の BBS でしたからなおさらです。この場をお借りして無罪の弁明をさせていただきたいと思います。

東京で仕事をした翌日、午後 1 時 30 分発の先得チケットで帰阪することにしてい



ました。お茶の水の楽器店は大体 11 時開店です。12 時 7 分お茶の水駅発に乗れば間に合うことを確認の上、B.G.というその楽器店に向かいました、場所が分からず迷いに迷いやっと辿り着きました。さっそくご対面。ケースを開けると、まるで深窓の令嬢のような印象、色白完全 UV カット状態。とても 15 年経ったと思えないまったくのミントでエンドピンさえ打たれていない状態でした。バック・サイドはインディアンローズ、トップはふ入りのスプルース、塗装はほとんどされていない薄いニス仕上げで触るのも恐る恐るって感じでした。ラベルには Stookey model custom for T.F.(依頼者)No.52 David P. LaqPlante と手書きのルシアーのサインが記されています。

手をハンカチで拭いたのち試奏、その時になってポールのギター奏法ってあんまり知らないことに気がつきました。とりあえずソーリン、違うか？ クークー違うな？ ミ・カバジョ、ちょっと近いか？ ガーデンソング、そうかな？ 禁じられた遊び、関係ないか？ そもそもガットの音自体あまり知識がないので、その良し悪しが分からないというのが結論でした。きざな言い方をすれば 15 年間も弾かれていないギターは幸せかな？ せっかく Stookey の名前までもらっているのだから、傷がつこうと汚れようと、誰かが演奏して聴く人を楽しませるギターであって欲しいと思いました。同時に我々 FC の皆の目の届くところにいて欲しいとも思いました。PP&M の事すら知らない人の手に渡り、またもとの「眠り姫」に戻ってしまうのは耐えられない思いでした。結婚を決めてした見合いのようなもので、買うか買わないかの迷いはありませんでした。また迷う時間ありませんでした。気が付くとサインをし、その場でエンドピンを打ってもらっていました。そんなわけで、彼女をうまく弾けない私の所にも可哀そうなので、現在愛智ポール氏のところでウオーミングアップ中です。デビューの節には、1993 年生まれの FC 女性新入会員のように歓迎してやって下さい。

今回はコメントが長くなってしまい、僕のギター遍歴に終止符を打ってくれた Larrivve L09 1974 の話をする紙面がなくなりました。もし許されるなら PART 3 として、その出会いと個人輸入奮戦記をお話ししたいと思います。